



濱田 仁：出雲國・十六島（うつぶるい）と ウップルイノリ

古来、日本ではノリやコンブ・ワカメ・カヂメ・アラメ・ヒジキ・ホンダワラ・アカモク等、多種の海藻を食べてきた。海藻が我々の先祖の重要な食事であった事は、今日どこの神社でも神饌（しんせん、神様に供える食事）として米、酒、魚の他に必ず海藻を用いる事からもうなづける。また、マクリ・ミルは駆虫薬や腹薬、マクサ・エゴノリは煮て固めていわゆる心太（ところてん）や寒天にし、フノリは衣類のノリや漆喰（しっくい）にも混ぜて使われた。更に、山陰地方の千数百年を超える古い神社ではワカメやホンダワラを用いる神事もある。我々の先祖が海藻を清浄なもの、神の依り代（よりしろ、神霊が依り付く物）として神聖視し、それを食べたりお祓いに用いて身を浄めていた事を今に伝えている。このように、日本では生活の隅々に藻類が入り込んでいる。

このシリーズでは、国の内外を問わず、海藻文化を訪ねる旅に出たいと思う。執筆も私だけでなく、多くの方に参加して頂き、場所も日本からアジアへ、さらに世界へと出かけ、藻類から見た民俗学と歴史学を少しでも学びたいと願っている。それで、最初の旅は、出雲の十六島（うつぶるい）へ行ってみる事にした。

十六島への旅

ウップルイノリの「島」見学

海苔の神様と言われた故三浦昭雄先生から、出雲市十六島町のウップルイノリ（図1）の話を知っていたので、一度自分でも十六島を訪ねてみたいと思っていた。ウップルイノリは、日本では本州日本海側から北海道の小樽付近迄と、東北地方の太平洋側に分布し（三浦昭雄 私信）、韓国では日本海に面し北朝鮮と南北に分断された江原道、南隣の慶尚北道、南西部の多島海諸島に分布する（岡村 1936）。

さて、2002年2月半ば、日御崎神社の和布刈（めかり）神事後、島根大学の岡村修司博士と出雲大社神楽殿の日本一大きな注連縄（しめなわ）の下で待ち合わせ、十六島に連れて行って貰った。十六島では、大谷夫人の伝で小沢房子さんに会った。近所には親戚で古希を越えた渡部 勇氏夫妻が住んでいる。

渡部夫人が、杖をついて渡部家の「島」へ案内して下さった。「島」というのは、ノリの生える平らな岩の事である。十六島町は島根半島の西に突き出た三角形の岬で、「出雲國風土記」（733、秋本 1958 校注）の「於豆振埼（おつふりのさき）」の事で、朝鮮からの漂流物も届く。渡部家の「島」は家から海岸沿いに北西へ車で5分程走り、そこから15分程山道を登り降りした岬の先端近くにある。「島」は十六島湾の内と外に広がり、渡部家のように、外洋近くでツルツルした岩とザラザラした岩の混じった「島」が良質なノリを産するそうだ。「島」の手前は急斜面の巨大な岩山で、高さは30mはあるだろう。岩山の上の通路には足形状の足場が彫られており、それを踏

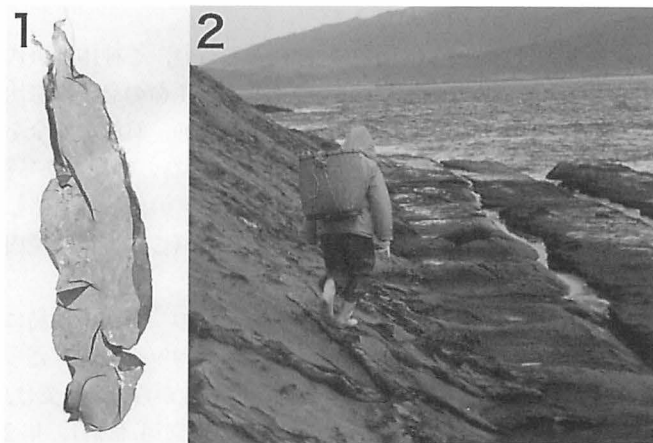


図1-2 1. 十六島のウップルイノリ（長さは9.5 cm）。 2. ウップルイノリを産する「島」。島根県出雲市十六島町の渡部家の「島」付近。

み外さぬように一步一步用心しながら海岸へ降りて行く。潮間帯上部に生育するウップルイノリにとって、まさにお誂え向きなことに、岩山は海面付近で急に座敷状の水平な磯となり、沖に5~20mほど張り出し、一面にウップルイノリが生える。これが土地台帳にも登録された個人財産の「島」で、岩の切れ目や細かい線が、隣の「島」との境界である。丁度、近所の「島持ち」の婦人が来てノリを摘み、背中に背負った竹籠に入れて帰るところで（図2）、千数百年以前の出雲國風土記の時代に戻ったような錯覚を覚えた。現場でノリを採って食べてみると、コシがあって甘みがあり、程良い塩味がきいてとても美味しかった。

昔はノリの前にウシノケ（ウシケノリ）が生えた。ウシノケはノリと近縁の紅藻だが旨くない。また、ノダレと呼ばれるコケのような雑藻もあったそうだ。今は10月中旬に、苛性ソーダを薄めて「島」を掃除するので、いきなりウップルイノリが生えて来る。

「島」は10月から3月迄は関係者以外立ち入り禁止となる。最盛期は12月と1月で、1日に3cm伸びる事もある。長さ20cm、幅5mm程に育った柔らかい一番海苔が最も美味しく、乾燥物100gが8000円もする。我々の訪ねた2月半ばはシーズンも終わりに近かった。

「島」から戻ると、小沢夫人は海岸から100mほど山手の自宅に我々を案内し、暖かい炬燵のに入った奥座敷に我々を招き入れ、炙ったノリやお雑煮を御馳走して下さいました。海苔は真水で洗って干し、炙って食べると香ばしい。お雑煮は、暖かい出汁の中に餅と初物の一番ノリが入っていてとても美味しく、小沢夫人の優しく暖かい気持ちが伝わって来た。

十六島で食べるノリ以外の海藻は、春はアラメ・カシカメ（ハバノリの方言）・ヒジキなど、夏にはテングサを採って食べた。

モツクも食べたが、最近土木工事のせいか海が汚れ、少なくなってきたようだ。

紫菜島（のりしま）神社と許豆（こず）神社

出雲國風土記楯縫郡には、現在も十六島にある紫菜島社（のりしまのやしろ、現在の紫菜島神社）、許豆社（こずのやしろ、現在の許豆神社）の名が見える。

紫菜島神社は津上（つがみ）神社とも言い、ご神体は事代主命（ことしろぬしのみこと）。つまり大国主命の息子の恵比寿様である。この神社は海苔・魚介類の豊漁、航海の安全を祈るが、何と言っても海苔を神様に供える為の神社である。元々渡部家の隣にあったが、大正時代、バスの車庫や道路拡張の為、裏山の階段を二百段程登った許豆（こず）神社境内に移され、その摂社となった。

許豆神社は十六島近辺に数箇所あり、その一つが十六島にある。祭神は、元来土地の氏神の許豆命（こずのみこと）だったようだが、400～500年前、京都稲荷大社から分霊を受け、稲荷大明神を祭るようになった（竹下幹正宮司 私信）。年2度の祭りは十数年前迄は十六軒の「島持ち」が主催した。10月の土地の氏神の祭りは人手不足で廃止されたが、京都稲荷大社の旧暦2月初午の祭は3月の第2土曜日に変更して残っている。当日は出雲市国富（くんどみ）町から宮司を招いて海苔の神様を祀り、初物の一番海苔を供えて海苔の豊漁を祈り、笛・太鼓・鈴の音に合わせた獅子舞いを舞い、十六島は賑わう。現宮司は竹下家15代目で、出雲國風土記の時代とのつながりはないようである。

松江市の佐太神社や大田市の五十猛神社などでも見られるジンバ（ホンダワラ）やモバ（ホンダワラ属の海藻）でのお祓いがここでも見られる。神職はジンバやモバを海水に浸け、パツパツと左右に振って自分を祓って身を浄め、建物を浄め、人々を浄める。その後、祝詞を上げ、神棚に供える。一般の人も、モバでお祓いをし、終わった後は近くの神社に掛けておく風習がある。

ウップルイノリ、歴史への旅

昔、朝鮮から船に乗って人がやってきた。村人は、海賊が漂流したのかと思い、武器を持って集まって見たら十六人の僧侶であった。僧侶達は船に沢山のお経を積んでおり、島で護摩を焚いてお経を上げた。その島が十六島岬の先端の経島（きょうじま）で、石碑が建っている。また、護摩の灰を磯に撒いたらノリがよく生え、僧侶は食べられるものだと教えてくれたそうだ（渡部 勇氏）。

「出雲國風土記」（733、秋本1958校注）の楯縫郡（たてぬいのおおり）の条には「凡（すべ）て北の海にある所の雑物（くさぐさのもの）は（隣の）秋鹿（あいか）郡に説けるが如し、但し紫菜（ムラサキノリ）は楯縫郡、尤も優れり」とある。楯縫郡十六島の「島」は上述のようにノリ繁殖の最適地だから、「紫菜」がウップルイノリを指したことは明らかだ。関根（1969）、三浦昭雄（私信）も紫菜はウップルイノリとしている。また、無良佐木乃里とか牟良佐支乃里と万葉仮名でルビが振

られるから、紫菜はムラサキノリと読んだ。

奈良国立文化財研究所の木簡データベースがある。木簡は、税の一種の調として奈良の都に納められた際の荷札であった。平城京の長屋王（684-729）邸出土の木簡には「出雲國交易紫菜三斤」「隱伎国海部郡作佐郷大井里海部小付調紫菜二斤」「隱伎国智夫郡由良郷津守部足人紫菜二斤」とある。「紫菜」は出雲や隠岐の現存の地名、海士町（海部郡）とか知夫村（智夫郡）など、現在のイワノリの産地と共に記されている。

時代は少し下がり、長岡京（784-794）跡出土の木簡には「四日内入物紫菜一櫃海藻根一櫃青乃利一一櫃」とある。ここでは海藻根（ワカメのメカブであろう）やアオノリ（青乃利）と共に調として納められたことが分かる。

時代はさらに下がり、江戸時代の百科事典、「和漢三才図絵」（寺島良安1712頃）では、十六島苔（ウップルイノリ）の項があり、雲州の十六島に産し、海中の石上に付生する等とある。「紫菜」の項は別にあり、阿末乃里（あまのり）と読まれ、南海に産する。石に付いていて正青色。採って干すと紫色等とある。アマノリ属の海藻を2種類記した最初ではないだろうか。

松江藩七代藩主で文人の松平不昧（ふまい）公・治郷（はるさと、1751-1818）は、江戸の茶会でこのノリの羽織を着て諸大名に茶を振る舞った。海の綺麗な昔は磯の上にノリがビッシリと生え、50cmにも成長したが、干潮の時に乾いたノリを綺麗に剥ぎ取り、羽織に仕立てたのである。明治以後も皇室や県知事に献上したという。

ウップルイノリの事は、イワノリ、マノリ、磯から剥ぐのでハギノリ、また老人は1960年頃までオッポーとも呼んでいたそうだ（小沢房子氏）。

古来、十六島百戸、と言うが、百戸のうち「島持ち」は十六戸だけだった。一時分割して十八戸になり、今は高齢化で管理する人が減り十三戸となり、減少傾向にある。

最後になるが、ウップルイの語源は、海苔に付いた砂を「打ち振るう」の訛りとする説（三浦私信、など）や、古代朝鮮語の断崖絶壁との説もある。また先述のように、出雲國風土記の於豆振埼（オツフリのさき）は十六島岬のことだが、このオツフリがウップルイと変化し、さらにノリの名前になったのかもしれない。十六島と書く所以は、島持ちが16軒あったからだという説の他に、朝鮮から来た僧達が旧平田市の鰐淵寺（がくえんじ）を通って出雲市で般若寺を開いて住み、十六善神（ぜんじん）と敬われたから、という説もある。また、十六島で海苔を産する平らな磯をシマと言うのは、古代朝鮮語で対馬の事を二島を意味するツショムと言ったように（元富山大学、藤本幸夫氏私信）、古代朝鮮語のショムと同語源なのかも知れない。

引用文献

- 秋本吉郎（校注）1958. 風土記（733）. 出雲國風土記、楯縫郡、176頁、岩波書店。
岡村金太郎1936. 日本海藻誌、内田老鶴圃、東京。
関根真隆1969. 奈良朝食生活の研究、吉川弘文館。
寺島良安1712頃. 和漢三才図会17. 東洋文庫（平凡社、1991）。
（富山大学医学部）